

エンディング産業展 (ENDEX) における アンケート調査報告

葬送儀礼における宗教性について (前編)

総合研究所では、葬送儀礼に関する研究の一環として、2017 (平成29) 年度に続き、2018 (平成30) 年度のエンディング産業展 (主催: TSO International 通称: ENDEX) においても、主催者との共催で、アンケートと聞き取り調査を実施しました。2回目となる今回は、よりよい葬儀を具体的に模索するため、アンケートのテーマを「葬送儀礼における宗教性」としました。

まずアンケートの実施要領と回収数は次の通りです。

〈実施機会Ⅰ〉

日 時…2018 (平成30) 年

8月22日～24日

場 所…エンディング産業展2018

(東京ビッグサイト)

〈実施機会Ⅱ〉

日 時…2018 (平成30) 年

11月14日～16日

場 所…関西エンディング産業展20

18 (インテックス大阪)

回収数…2006件 (前述Ⅰ・Ⅱ合算)

(回答者区分内訳)

エンディング産業関連業者…1009件

宗教者…231件

一般来場者…525件

その他・不明 (無回答)…241件

それでは、以下にその結果と、そこから読み取れる主なものについて報告したいと思います。

特に今回のアンケート調査からは、単に社会全体の傾向だけではなく、宗教者と、エンディング産業関連業者〔以下「業者」〕や一般の来場者〔以下「一般」〕との間に生じている「意識のズレ」が見て取れたことを、最初に報告しておきます。

なお本文中、アンケート結果の具体的な数値は、論を進めるうえで必要なものに限り記載しております。その他に関し

ては、図表を併載しておきますので、そちらをご参照ください。

* * *

◆問1 あなたが、葬儀に宗教が必要だと思う場合、それはどのような理由からですか？（いくつでも○印）

まず、業者と一般においては、「故人の救済や成仏^{じょうぶつ}、冥福^{めいふく}のため」という、故人の死後に対する不安等の解決のため、葬儀に宗教が必要と感じている割合が、それぞれ70・3%、65・3%と一番高くなっています。これは、宗教一般の意義に即したもので、当然の結果といえるでしょう。

しかし宗教者に限っては、48・1%にとどまっており、「グリーフ（悲嘆）ケアのため」が一番高い割合（60・6%）を示しています（業者と一般では、それぞれ37・6%、22・7%と、かなり低い値

となっています）。

この結果からは、業者や一般が、故人のために宗教が必要と考えている（それは間接的に遺された者のためにもなるでしょうが）のに対し、宗教者の意識は、グリーフ・ケア、つまり遺族や会葬者という、遺された者に直接向けられている、といつてよいでしょう。故人のために宗教が葬儀に必要と考えている以上、その点を抜きにグリーフ・ケアが成り立つか否か^{いな}は、一考の余地がありそうです。

また業者と一般においては、「慣例・世間体のため」が、22・5%、24・4%という一定の割合を示しています。この結果からは、遺族や会葬者にとって、葬儀における宗教性が形骸化^{けいがい}したものとなっている点も、課題として指摘されるでしょう。

◆問2 あなたが、葬儀に宗教が不要だと思う場合、それはどのような理由からですか？（いくつでも○印）

まず業者と宗教者においては、「経済的に負担だから」という回答が、27・6%、27・3%と一番高い割合となっています。

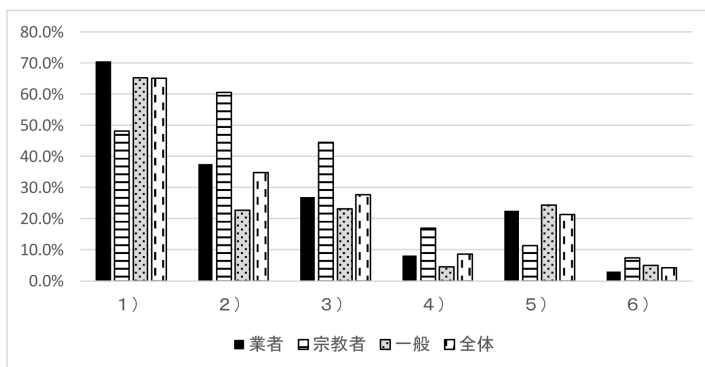
それに対し、実際に葬儀費用を負担する側である一般の回答では、20・2%と若干低めで、むしろ「信仰する宗教がないから」が23・2%と一番高い割合を示しています。

また同じく一般の回答では、「葬儀後の寺付きあい負担だから」が19・2%と、「信仰する宗教がないから」（23・2%）や「経済的な負担」（20・2%）と同程度の割合となっています。

このように一般においては、経済的な負担もさることながら、宗教に対する期待値の低さも理由になっていることが、

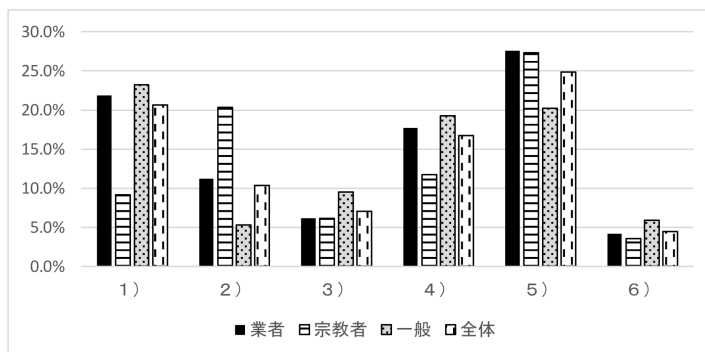
問 1. あなたが、葬儀に宗教が必要だと思う場合、それはどのような理由からですか？（いくつでも○印）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
1) 故人の救済や成仏、冥福のため	709 (70.3%)	112 (48.1%)	343 (65.3%)	1307 (65.2%)
2) グリーフ（悲嘆）ケアのため	379 (37.6%)	140 (60.6%)	119 (22.7%)	700 (34.9%)
3) 自身の死生観のため	271 (26.9%)	103 (44.6%)	122 (23.2%)	556 (27.7%)
4) 宗教的な雰囲気のため	83 (8.2%)	39 (16.9%)	24 (4.6%)	173 (8.6%)
5) 慣例・世間体のため	227 (22.5%)	26 (11.3%)	128 (24.4%)	430 (21.4%)
6) その他	31 (3.1%)	17 (7.4%)	26 (5.0%)	87 (4.3%)



問 2. あなたが、葬儀に宗教が不要だと思う場合、それはどのような理由からですか？（いくつでも○印）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
1) 信仰する宗教がないから	221 (21.9%)	21 (9.1%)	122 (23.2%)	414 (20.6%)
2) 宗教に対する不信感から	113 (11.2%)	47 (20.3%)	28 (5.3%)	207 (10.3%)
3) 葬儀の時に手間が増えるから	63 (6.2%)	14 (6.1%)	50 (9.5%)	140 (7.0%)
4) 葬儀後の寺付きあい負担だから	179 (17.7%)	27 (11.7%)	101 (19.2%)	335 (16.7%)
5) 経済的に負担だから	278 (27.6%)	63 (27.3%)	106 (20.2%)	498 (24.8%)
6) その他	42 (4.2%)	8 (3.5%)	31 (5.9%)	88 (4.4%)



課題として指摘されるでしょう。

もう一点注目しておきたいこととして、宗教者においては、「宗教に対する不信感から」が20・3%と、「信仰する宗教がないから」の9・1%を大きく上回っています。宗教者に見られるこのような傾向は、おそらく90年代以降に起こった宗教関連の事件が、日本社会に宗教への不信感をもたらしたことに對する宗教者側の思いが、自己反省となつて表れている、ともいえるでしょう。

しかし、業者や一般では、それぞれ11・2%、5・3%と「宗教に対する不信感から」よりも、「信仰する宗教がない」(業者21・9%、一般23・2%)が上回っており、宗教不信よりも、宗教に対する無関心あるいは関係の希薄化が課題である、と捉えるべきでしょう。

◆問3 あなたは、葬儀において宗教・宗派などの種別にこだわりますか？(1つのみ○印)

本設問に對し、宗教者においては、「宗派(各宗教の○○宗や○○派など)の種類までこだわる」が53・3%と過半数を占めています。

對して業者と一般では、「宗教・宗派などには、こだわらない(何らかの宗教があればよい)」、あるいは「宗教(仏教・神道・キリスト教・イスラムなど)の種類程度はこだわる」が、それぞれ合計で業者48・5%、一般52・5%となっています。

この結果から、業者と一般では宗教の必要性は感じていても、その多くが、個別の宗派や教団的な要素を求めている、という状況が窺われます。

また、「前例(祖父母や父母などの葬儀)にならう」という回答の割合が、業者で29・5%、一般で27・2%と、それ

ぞれ第1位、第2位となっていることも見逃せません。残念ながら葬儀における宗派色が、業者や一般の意識においてそれほど意味をなさないものであることが、課題として指摘されるでしょう。

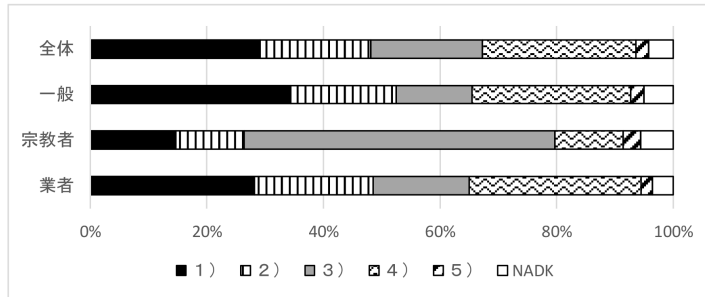
◆問4 あなたの考える、葬儀で宗教者(僧侶など)が必要な場面はどれですか？(いくつでも○印)

「儀式(読経や法話)の時」が、全体として突出して高い割合となったことは、想像に難くない結果でしょう。一方、他の項目では、宗教者とそれ以外で異なる結果となったものも見られました。

まず宗教者においては、ほぼすべての項目で業者や一般より高い数値(20%以上)を示していますが、業者や一般で20%を超えるのは、儀式後のお別れの時や火葬場での点火の時など、区切りとな

問3. あなたは、葬儀において宗教・宗派などの種別にこだわりますか？（1つのみ〇印）

	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
1) 宗教・宗派などには、こだわらない（何らかの宗教があればよい）	285 (28.2%)	34 (14.7%)	181 (34.4%)	582 (29.1%)
2) 宗教（仏教・神道・キリスト教・イスラムなど）の種類程度はこだわる	205 (20.3%)	27 (11.7%)	95 (18.1%)	381 (19.0%)
3) 宗派（各宗教の〇〇宗や〇〇派など）の種類までこだわる	166 (16.5%)	123 (53.3%)	68 (13.0%)	386 (19.2%)
4) 前例（祖父母や父母などの葬儀）にならう	298 (29.5%)	27 (11.7%)	143 (27.2%)	528 (26.3%)
5) その他	19 (1.9%)	7 (3.0%)	12 (2.3%)	44 (2.2%)
NADK*	36 (3.6%)	13 (5.6%)	26 (5.0%)	85 (4.2%)
計	1009 (100.0%)	231 (100.0%)	525 (100.0%)	2066 (100.0%)



*NADK＝無回答など

る儀礼に分類される4～5項目にとどまっています。

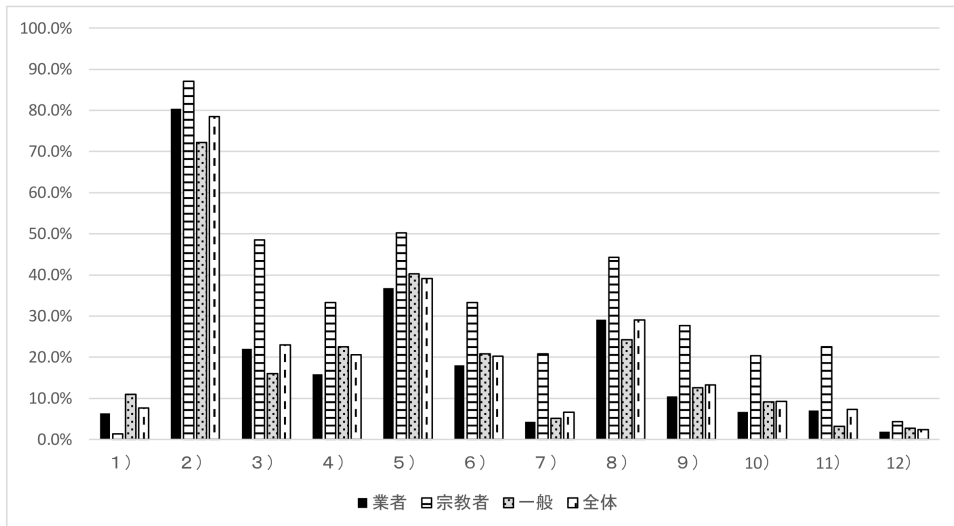
また業者や一般では、火葬場への道中やお斎・精進落とし、葬儀業者との打ち合わせなど、儀礼以外の項目において、宗教者のそれに比べ低い数値となっています。このような結果は、宗教者が儀礼的な場面以外では、残念ながらそれほど期待されていない、ということの表れかもしれません。

◆問5 あなたは、葬儀で宗教者（僧侶など）が不要と感じたことはありませんか？（1つのみ〇印）／どのようなときに、不要と感じましたか？（いくつでも〇印）

まず、全体として「ある」という回答が約4割を占めています。そのなかでも、どのようなときに不要と感じたかを見してみると、「読経や法話が下手なとき」

問4. あなたの考える、葬儀で宗教者（僧侶など）が必要な場面はどれですか？（いくつでも○印）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
1) 特にない	65 (6.4%)	3 (1.3%)	58 (11.0%)	152 (7.6%)
2) 儀式（読経や法話）の時	811 (80.4%)	201 (87.0%)	379 (72.2%)	1575 (78.5%)
3) 臨終の時	223 (22.1%)	112 (48.5%)	84 (16.0%)	461 (23.0%)
4) 納棺の時	160 (15.9%)	77 (33.3%)	118 (22.5%)	413 (20.6%)
5) 儀式（読経後）のお別れの時	371 (36.8%)	116 (50.2%)	211 (40.2%)	785 (39.1%)
6) 葬儀会場から火葬場への出棺の時	182 (18.0%)	77 (33.3%)	109 (20.8%)	406 (20.2%)
7) 火葬場への道中	43 (4.3%)	48 (20.8%)	27 (5.1%)	133 (6.6%)
8) 火葬場で（特に点火の時）	294 (29.1%)	102 (44.2%)	127 (24.2%)	581 (29.0%)
9) 拾（収）骨の時	106 (10.5%)	64 (27.7%)	66 (12.6%)	265 (13.2%)
10) お齋・精進落としの時	68 (6.7%)	47 (20.3%)	48 (9.1%)	185 (9.2%)
11) 葬儀業者との打合せの時	71 (7.0%)	52 (22.5%)	17 (3.2%)	146 (7.3%)
12) その他	19 (1.9%)	10 (4.3%)	14 (2.7%)	48 (2.4%)

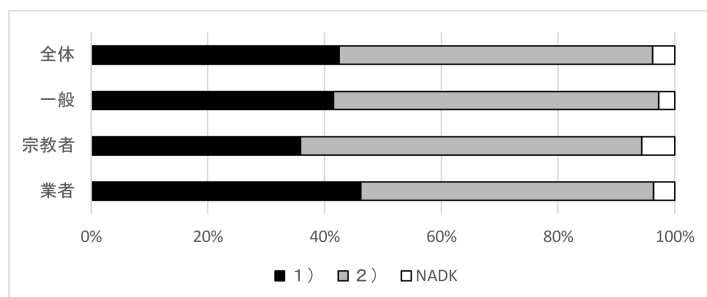


と「僧侶に不信感を抱いたとき」が、それぞれ24・5%、30・7%と高い割合を示しています。この結果は、2017年度のアンケート結果（『宗報』2018年3月号）同様、「僧侶の質が問われている現状」を示すもの、といわざるをえないでしょう。

またそれとは別に、一般では、「対応などの負担を考えたとき」と「経済的なことを考えたとき」が、それぞれ16・2%、24・8%と、宗教者（9・6%、15・2%）に比べて高い値になっていることについては、宗教者としてこれからの葬儀の在り方を考えていく場合、施主側の精神的、金銭的負担という点について、認識を改める必要があります。

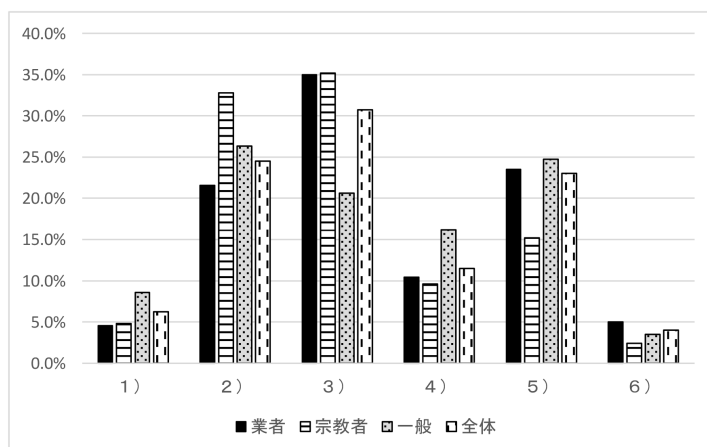
問5. あなたは、葬儀で宗教者（僧侶など）が不要と感じたことはありますか？（1つのみ〇印）

	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
1) ある	466 (46.2%)	83 (35.9%)	218 (41.5%)	852 (42.5%)
2) ない	507 (50.2%)	135 (58.5%)	293 (55.8%)	1078 (53.7%)
NADK	36 (3.6%)	13 (5.6%)	14 (2.7%)	76 (3.8%)
計	1009 (100.0%)	231 (100.0%)	525 (100.0%)	2006 (100.0%)



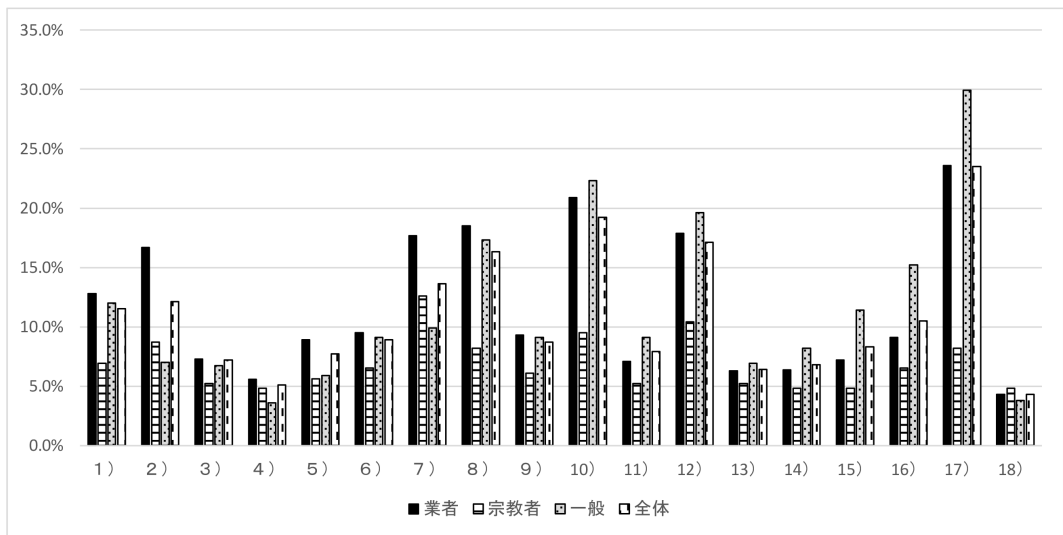
どのようなときに不要と感じましたか？（いくつでも〇印）（業者 466 件、宗教者 83 件、一般 218 件、全体 852 件）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
1) そもそも必要性を感じない	30 (4.5%)	6 (4.8%)	27 (8.6%)	76 (6.2%)
2) 読経や法話が下手なとき	143 (21.6%)	41 (32.8%)	83 (26.3%)	298 (24.5%)
3) 僧侶に不信感を抱いたとき	232 (35.0%)	44 (35.2%)	65 (20.6%)	374 (30.7%)
4) 対応などの負担を考えたとき	69 (10.4%)	12 (9.6%)	51 (16.2%)	140 (11.5%)
5) 経済的なことを考えたとき	156 (23.5%)	19 (15.2%)	78 (24.8%)	280 (23.0%)
6) その他	33 (5.0%)	3 (2.4%)	11 (3.5%)	49 (4.0%)



問 6. あなたが、葬儀で不要だと思う儀式（おつとめ）に○印をつけてください（いくつでも○印）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
1) 臨終の儀式（枕経）	129 (12.8%)	16 (6.9%)	63 (12.0%)	231 (11.5%)
2) 納棺の儀式	168 (16.7%)	20 (8.7%)	37 (7.0%)	243 (12.1%)
3) 通夜の儀式	74 (7.3%)	12 (5.2%)	35 (6.7%)	145 (7.2%)
4) 葬儀式	57 (5.6%)	11 (4.8%)	19 (3.6%)	103 (5.1%)
5) 出棺の儀式	90 (8.9%)	13 (5.6%)	31 (5.9%)	154 (7.7%)
6) 火葬場での儀式	96 (9.5%)	15 (6.5%)	48 (9.1%)	179 (8.9%)
7) 拾（収）骨の儀式	179 (17.7%)	29 (12.6%)	52 (9.9%)	273 (13.6%)
8) 遺骨を持ち帰った時の儀式	187 (18.5%)	19 (8.2%)	91 (17.3%)	326 (16.3%)
9) 初七日	94 (9.3%)	14 (6.1%)	48 (9.1%)	175 (8.7%)
10) 中陰（七日ごとのおつとめ）	211 (20.9%)	22 (9.5%)	117 (22.3%)	385 (19.2%)
11) 四十九日（満中陰）	72 (7.1%)	12 (5.2%)	48 (9.1%)	159 (7.9%)
12) 百か日	181 (17.9%)	24 (10.4%)	103 (19.6%)	343 (17.1%)
13) 一周忌	64 (6.3%)	12 (5.2%)	36 (6.9%)	128 (6.4%)
14) 三回忌	65 (6.4%)	11 (4.8%)	43 (8.2%)	137 (6.8%)
15) 七回忌	73 (7.2%)	11 (4.8%)	60 (11.4%)	167 (8.3%)
16) 十三回忌	92 (9.1%)	15 (6.5%)	80 (15.2%)	211 (10.5%)
17) それ以降の年忌法要	238 (23.6%)	19 (8.2%)	157 (29.9%)	472 (23.5%)
18) その他	43 (4.3%)	11 (4.8%)	20 (3.8%)	87 (4.3%)



◆問6 あなたが、葬儀で不要だと思ふ儀式（おつとめ）に〇印をつけてください（いくつでも〇印）

まず、この設問からは、近年の傾向を示すように、全体として「中陰」^{ちゅういん}と「百か日」について不要と考える割合が、20%近くと高い値となっています（ただし満中陰^{まんちゅういん}に関しては、不要とする割合は低い）。

次に、宗教者とそれ以外の差が大きいものとしては、先の「中陰」と「百か日」に加え、「臨終の儀式（枕経）^{まくらぎやう}」や「遺骨を持ち帰った時の儀式」、十三回忌以降の年忌法要（図表中17番の回答）などがあげられます。

その一方で、本設問では業者と一般の間での差が大きい項目も確認されました。「納棺の儀式」と「拾（収）骨の儀式」では、業者において不要と考える割合が、一般よりも約10%高い結果となっ

ています。このような結果からは、今後業者主導による、積極的な葬送儀礼の簡略化が進む可能性が指摘されるでしょう。（以下次号につづく）

（浄土真宗本願寺派総合研究所
仏教音楽・儀礼研究室長 福本康之）